

学位請求論文要旨

龍谷大学名誉教授 藤谷聖和

『フィッツジェラルドと短編小説』

(彩流社 2016年2月、龍谷叢書36号)

目次

序章 フィッツジェラルド短編研究の進展

1章 ゼルダとの葛藤

1. バジル物
2. ジョゼフィーヌ物
3. 女性像の変化

2章 フィッツジェラルドと中西部

1. 中西部
2. 場所と作品
3. St. Paul 再訪

3章 手法の変化

1. 絵画的手法—クレイン、ヘミングウェイ、フィッツジェラルド—
2. フィッツジェラルドとハリウッド
3. *The Pat Hobby Stories* —映画手法の影響について—
4. 『メトロポリタン』版“Winter Dreams”の加筆・修正

4章 大衆雑誌と短編創作

1. 市場開拓—*The Smart Set*時代(1919)から*The Great Gatsby*(1925)まで—
2. 創作の実験—*The Saturday Evening Post*時代—
3. 飲酒の影響—*The Saturday Evening Post*から*Esquire*へ—

結論

参考文献

あとがき

索引

フィッツジェラルド(F. Scott Fitzgerald)の短編小説は、これまで、長編小説創作のための経済的余裕を得るために濫作され、これらの濫作がなければすぐれた長編小説をもっと書くことができた、評価の対象にさえならなかった。本論は、逆に、これらの短編こそ、フィッツジェラルドの創作の原動力となっていることを証明しようとするものである。

構成は、序章「フィッツジェラルド短編研究の進展」、1章「ゼルダとの葛藤」、2章「フィッツジェラルドと中西部」、3章「手法の変化」、4章「大衆雑誌と短編創作」、結論からなっている。

序章「フィッツジェラルド短編研究の進展」はフィッツジェラルドの短編に対する偏見への反論の歴史を記した。フィッツジェラルドの短編に関しては、最初の研究書となる *F. Scott Fitzgerald: A Study of the Stories* (1971) で、著者のヒギンズ(John A. Higgins)は、フィッツジェラルドの短編創作は、パーティや海外旅行という派手な生活費稼ぎのための濫作で、濫作がなければもっといい長編小説を創作できたと捉えており、この意見が主流であった。短編を違った角度から捉えてみようという動きが 1990 年代から起こるが、その起爆剤となったのは 1963 年に出されたブルッコリィ(Matthew J. Bruccoli)の *The Composition of Tender Is the Night* である。ブルッコリィは *Tender Is the Night* の創作過程を扱っているが、「短編がフィッツジェラルドの、より整えられた備忘録に値するものになっている」、「短編に於いてフィッツジェラルドがテーマや登場人物、セッティングを実験しており、後にそれらを長編で展開させている」(*Composition* 70)と、すでに短編と長編との関連を指摘しており、短編を重要視していた。ブルッコリィは *Tender Is the Night* の創作過程に焦点をあてていたために、短編との関連については深く捉えなかったが、1996 年に『コンパニオン』(*Reader's Companion to F. Scott Fitzgerald's Tender Is the Night*)で『夜はやさし』の生成過程を扱っている。作品への注を入れ、校訂箇所を示し、アペンディックスとしてアンダソン(George Anderson)の論文「『夜はやさし』に於ける短編移入」(“F. Scott Fitzgerald's Use of Story Strippings in *Tender Is the Night*”)を掲載している。アンダソンは『夜はやさし』に移入されている短編、移入箇所を捉え、初出の雑誌掲載の短編が『夜はやさし』でどのように使われているかを詳しく示している。

他に、ブルッコリィの弟子であるマンガム(Bryant Mangum)が、短編に関して *A Fortune Yet: Money in the Art of F. Scott Fitzgerald's Short Stories* を発表し、フィッツジェラルドの短編創作はエネルギーの浪費ではなく、『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby* 1925)や『夜はやさし』(*Tender Is the Night* 1934)など長編創作に役立っていると、短編創作を肯定する立場をとっている。

以上のように、長編との関連で短編小説の果たしてきた役割が評価されるようになってきた。

1章「ゼルダとの葛藤」はフィッツジェラルドに短編を創作させた要因を妻ゼルダとの葛藤に捉えた。フィッツジェラルドの女性像はフラッパーにみられる「強い女性」から、感情破綻を起こして崩壊していく「弱い女性」へと次第に変化している。同時に男性像も

変化している。金持ちの、美人のフラッパーに翻弄された「悲しき若者」は姿を消し、中期(1928年以降)の作品では中年の父親になっており、かつての弱さは見られない。「悲しき若者」の弱い男性像はもはやなく、逆に崩壊から立ち直る強い男性像が捉えられる。ストーリーもフラッパー対「悲しき若者」の恋から、中年男性対自分の娘あるいは少女の組み合わせで、恋愛関係よりも崩壊から立ち直る男性像にウエイトが移っている。

金持ちの美女ばかり描いていたフィッツジェラルドが、何故、異なる女性像を描くようになったかを、精神分析学でいう「幼児ナルチズム」に対応する「母親」の視点から捉えた。

フィッツジェラルドは1928年からバジル物と呼ばれる一連の短編をポスト誌に連載し、強い母親から独立し、自立していくバジル少年のイニシエーション・ストーリーを描いた。大衆雑誌受けする設定で、表面的には母親メアリーから自立していくフィッツジェラルドの少年時代が描かれているが、実際は「母親ゼルダ」からの自立が描かれている。続いて連作されるジョゼフィーヌ物で、フラッパーの崩壊が描かれるのも偶然ではなく、ゼルダへの決別と捉えられる。夫に対抗しようとする妻ゼルダとの葛藤がフラッパーの崩壊を描かせ、『夜はやさし』のダイヴァー像につながる男性像を描かせるようになった。

2章「フィッツジェラルドと中西部」は少年時代を過ごした中西部がフィッツジェラルドの癒しの場となっていることを指摘した。時代の波に乗っていこうと東部志向になる中西部に、フィッツジェラルドは憧れと反発という二律背反的な感情を抱いていた。道徳的基準は常に中西部にあり、その視点から東部、南部、西部を捉えていた。フィッツジェラルドが創作に打ち込んだ場所、すなわち、ミネソタ、グレートネック、デラウェア州ウィルミントンが創作を刺激してくれた。セント・ポールは短編の素材に多く使われていながら、町は三代しか遡れないほど歴史が浅い。にもかかわらず、町の発展について、これまで言及がなかった。ミシシッピ川の単なる港町にすぎなかったセント・ポールが、鉄道で結ばれることでいかに発展を遂げたかについて触れた。東部、西部、カナダ、南部につながり、セント・ポールは他の都市と同じように発展していったが、フィッツジェラルドのアイデンティティは常に中西部にあった。

3章「手法の変化」はアルコール中毒に陥ったフィッツジェラルドが、これまでのイメージネーションに訴える手法から、映画のシナリオライターの体験から会得したカメラを意識した手法への変遷を捉えた。フィッツジェラルドは、かつて、ヘミングウェイの短編集『我らの時代』(*In Our Time* 1925)についての書評を書いているが、その中でヘミングウェイの文章を「一枚の絵」に喩え、「鮮明で、郷愁をかきたて、しかも緊張感に富んでいる」と指摘し、「その絵が完成するや、光はふっと消えて、物語は終わる」(*Bookman* LXIII)と、作品に印象的な絵を捉えている。なかでもフィッツジェラルドの脳裏に残る印象的な絵は“Soldier's Home”で「人生の苦しさを胸に刻みつけられたニック[sic 正しくはクレブス]に母親が台所に来て自分のそばに脆いてピューリタンのお祈りをしてくれと頼む場面である」(*Bookman* LXIII)と母子の葛藤の場面から強い印象を受けている。この場面の絵は異な

る状況ではあるが、後にフィッツジェラルドは“The Captured Shadow”で再現することになる。すでに「冬の夢」(“Winter Dreams” 1922)で1枚の絵となって読者の印象に残る場面をいくつか書いていたフィッツジェラルドは、ヘミングウェイに触発されて、バジル物でも母と息子一枚の絵となる葛藤の場面を描いている。

イマジネーションに訴える手法は、アルコール中毒によって継続が困難になる。人間に対する興味を喪失したのである。書けなくなったフィッツジェラルドを助けてくれたのが、ハリウッドのシナリオライターでの体験である。カメラを意識した手法、すなわち、イマジネーションではなくて、目に見えるような描写、「速記的レポート」のようなスケッチ風描写となった。パット物では、生活のために、平気で他人の作品を剽窃するような落ちぶれたシナリオライターのパットというアンチ・ヒーローを使って映画界を描き、これまでとは異なる形態をとっている。感情移入を避けて、客観的に、描写をするようになった。会話は映画で使われる「素早い会話」となり、文体もきびきびしたものとなった。映画界という新しい素材は、書けなくなったフィッツジェラルドを再生してくれた。

フィッツジェラルドの短編には「濫作」の刻印が押されてきた。確かに多くの短編が創作されてきたが、決して手を抜いた、駄作ではない。雑誌掲載の短編を短編集に集録する際には、多くの加筆・修正が施されてきたことは衆知の事実であるが、雑誌掲載の際の校正原稿

にも多くの加筆・修正がされていることが見逃されている。4節『メトロポリタン』版“Winter Dreams”の加筆・修正は、フィッツジェラルドの創作姿勢は、短編においても長編創作の姿勢と変わらないことを指摘した。ストーリーとしてはいくつかの矛盾を抱えていながら、その欠陥が指摘されてこなかったのは、一枚の絵のような、イマジネーションに訴える手法が秀逸であったからである。多くの加筆・修正が施されたためにストーリーの矛盾が出てきたが、フィッツジェラルドの一枚の絵は、ストーリーの矛盾に気が付かないほどのインパクトを与えている。

4章「大衆雑誌と短編創作」では、フィッツジェラルドの短編創作には大衆雑誌という創作実験所が大きな役割を果たしていることを指摘した。確かに、大衆雑誌はフィッツジェラルドに経済的余裕をもたらしてくれたが、創作においても素材や手法で実験の場を与えてくれた。『レッドブック』は他誌では敬遠されるシリアスな内容の作品をも引き受けてくれ、小説や短編のための実験所の役割を果たしてくれた。やがて、雑誌は小説の実験所、小説は短編小説の倉庫の役割を果たし、相互利用されるようになる。『ポスト』はフィッツジェラルドにとって『夜はやさし』の創作実験所となっている。同誌掲載の短編で扱った主題や場所、登場人物を『夜はやさし』に組み込んでいるからである。

結論ではフィッツジェラルドの短編はもっと評価されるべきで、優れた短編作家としても評価する時期にきていることを指摘した。アメリカの20年代という時代と妻ゼルダがフィッツジェラルドに短編の素材を与え、創作力を刺激した。長編創作の資金を得るためにも、借金の返金のためにも短編を書いたのであるが、作品の加筆・修正の跡をたどって

みると長編と同じような姿勢で創作されており、決して片手間仕事の的に創作されていなかったことが捉えられる。

アルコール中毒によりこれまでのようにイマジネーションに訴える描写ができなくなると、シナリオライターの体験からカメラを意識した書き方にと変化し、さらに、これまでの短編を長編に組み入れていくストリップングをおこなっており、短編創作はフィッツジェラルドの創作にけっしてマイナスではなかった。

フィッツジェラルドの短編は長編創作の原動力になっており、短編自体も、もっと評価されるべきである。

Works Cited

- Anderson, George. "A Writer Wastes Nothing: F. Scott Fitzgerald's Stories and the Achievement of *Tender Is the Night*"
_____. "F. Scott Fitzgerald's Use of Story Strippings in *Tender Is the Night*,"
Companion.
- Brucoli, Matthew J. *The Composition of Tender Is the Night: A Study of the Manuscripts*. Pittsburgh: U of Pittsburgh, 1963.
- Brucoli, Matthew J., and George Parker Anderson. *F. Scott Fitzgerald's Tender Is the Night: A Documentary Volume*. Detroit: Gale, 2003.
- Brucoli, Matthew J., and Judith Baughman. *Reader's Companion to F. Scott Fitzgerald's Tender Is the Night*. Columbia: U of South Carolina, 1996.
- Higgins, John A. *F. Scott Fitzgerald: A Study of the Stories*. Jamaica, NY: St. John's UP, 1971.
- Mangum, Bryant. *A Fortune Yet: Money in the Art of F. Scott Fitzgerald's Short Stories*. New York: Garland, 1991.